

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4470200652		
法人名	社会福祉法人泰生会		
事業所名	グループホーム「リベラ・ホーム別府」		
所在地	大分県別府市大字鶴見字中山田1068番地の1		
自己評価作成日	平成21年11月15日	評価結果市町村受理日	平成22年1月18日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://ap.oita-kaigo.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=4470200652&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	福祉サービス評価センターおおいた		
所在地	大分県大分市大津町2丁目1番41号		
訪問調査日	平成21年12月8日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症の方が自分の持っている力を最大限に引き出し、自分らしく生活を続けていけるような支援を行っています。家族等との連携を図り、利用者と家族との結びつきを大切にするため、日々情報交換を行ったり、地域密着型の特性を生かし、地域の一員としての受けるだけでなく、担い手としての参加することが出来るような関係づくりに取り組んでいます。
 なお、当施設ではグループホームを単に小さな家庭的な施設と考えるのではなく、ノーマライゼーションの理念を達成するための施設解体のプロセスの1里塚と捉え、グループホームを核にした地域ケアを最終目標に、「老いても安心して暮らせる街づくり、人づくり、地域福祉生活文化づくり」を目指しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

- ・事業所は、開設して14年になる。創設者の理念を守り、「人権を尊重した取り組み」を実践している。自己チェックシートを定期的に記入し、理念を振り返り、利用者一人ひとりの思いを大切にしている。
- ・利用者の心身機能に合わせて、居室を置にしたり、床の部屋は、滑らない工夫として絨毯を敷き、模様替えをしている。とくにトイレへの導線を考慮して、家具やベッドの配置替えをして排泄の自立へつなげている。排泄が自立した人が70%、車椅子を使用する人が0%となっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	施設の理念及び、お世話の基本方針に沿い、日々のケアをおこなっている。毎朝の申し送り時や、施設内勉強会等において確認し、施設理念の実現に取り組んでいる。	事業所は開設して14年になる。創設者の思いを大切に引き継ぎ、理念及び基本方針に沿い、申し送り時や毎月の定例会議でふり返りながら実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	住宅地とは離れた環境ではあるが、近隣の児童施設の子供達との交流が活発である。地域のお祭りなどにも声をかけて頂いている。	事業所は眺めの良い高台にあり、近隣に住宅地は少ない。公園や児童施設があるため、子供達との触れあいは活発である。地域の祭りなどにも声をかけてもらっている。また、地域住民を対象に施設内で、毎月「介護教室」を開き、交流がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎月地域住民を対象とした、「介護者教室」を開催している。又、地域の方からの相談に対して、適切なサービスに結びつけるため、地域包括支援センター等にも協力をお願いしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議の中で、近況及び、今後の予定についての意見を頂きながら、さらにサービス向上に努めている。家族代表からの率直な意見も得られている。	運営推進会議は、幅広い立場の人々の参加で、2ヶ月毎に開いている。特に、家族代表から貴重な意見が得られ、サービスの向上につなげている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	疑問点がある場合は市担当者へ連絡をとっている。また、別府市グループホーム協議会等を通じて市への連携を取り、サービスの向上に向けて取り組んでいる。	市の担当職員に疑問点を聞き、運営に反映している。運営推進会議への市の参加を「別府市グループホーム協議会」を通じて働きかけている。運営推進会議の結果は市へ報告し、協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員勉強会にて身体拘束に関する研修会を行っており、個人毎に行う自己チェック項目にも身体拘束に関する項目を盛り込んでいる。	理念に人権擁護を明示しており、全職員は身体拘束に対して正しく認識している。また、職員は定期的に、人権を大切にしたい7項目の『自己チェックシート』でふり返りを行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員勉強会にて高齢者虐待に関する研修会を行っており、個人毎に行う自己チェック項目にも虐待に関する項目を盛り込んでいる。		

事業者名:グループホーム「リベラ・ホーム別府」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員勉強会で地域福祉権利擁護事業や成年後見制度について講師を招き行っている。施設入所の際や、相談に対して説明を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者、家族等に重要事項の説明を行い、納得の上契約を行っている。又、解約の際は不安点や不明な点について尋ね、状況に応じて対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情処理に関する説明を掲示及び重要事項説明書に明記、苦情等ご意見箱を設置し、苦情処理のための委員会を開催し、家族代表・家族代表に委員をお願いし、ご意見を頂き運営に反映している。	利用者や家族には、気軽に苦情や相談が言しやすいように、サービス利用開始時に説明や文書で確認している。また、「苦情委員会」には家族代表も参加し、意見をもとに運営に反映している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	週1回の会議や年3回の全職員会議を意見交換の場としている。	運営に関する職員の意見は、週1回の会議や年3回の施設全体の会議で、提案や意見を聞き、運営に反映している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者自身が頻繁に現場に顔を出し、自ら利用者と過ごしたり、職員の業務についての把握を行っている。自己チェック表や振り返りシートを基に、職員の意欲等を把握し、職員が向上心をもって働けるように配慮している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修への参加を積極的に行っている。また、自主研修参加に関する職員の希望にも出来る限り応じている。又、必要な図書購入や職員の勉強したいこと等を募り、施設内勉強会のテーマとし、適任の講師を招き勉強を行っている		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	別府市内のグループホーム連絡協議会に入会しており、協議会主催の研修会や交流会に積極的に参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用前のアセスメントを十分行い施設を利用するにあたり、変化することを出来るだけ具体的にお話している。又、実際に利用前に施設を訪問して頂き、雰囲気を見て納得した上で利用して頂くようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用前のアセスメントを十分行うよう配慮している。又、実際に利用前に施設を訪問して頂き、雰囲気を見て納得した上で利用して頂くようにしている。家族の思いと利用者の思いの相違の確認を行い、今後のサービス内容の方向性を確認している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	現在の本人および家族の抱えている悩みや不安を少しでも取り除けるような配慮を行い、相談時の本人や家族の思い、状況の確認のうえ、改善に向けたプランの提示を行う。単独での援助が不可能な場合は、地域包括支援センターや他事業所との連携を行う。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	アセスメントを行い、職員が理解することにより、利用者の持っている力を引き出すことが出来ると考えている。利用者は人生の先輩であることを意識し、利用者から学ぶ姿勢を忘れないように心がけている。利用者の思いを知ることにより、利用者が持っている力を発揮できるような場面を想定しながら援助し共に支えあえる関係づくりを行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	アセスメントを行い、職員が理解することにより、利用者の持っている力を引き出すことが出来ると考えている。利用者は人生の先輩であることを意識し、利用者から学ぶ姿勢を忘れないように心がけている。利用者の思いを知ることにより、利用者が持っている力を発揮できるような場面を想定しながら援助し共に支えあえる関係づくりを行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人の訪問等の受け入れを積極的に行っている。又、年賀状、暑中見舞い等の文を出す等の援助を行っている。そのほか、行きつけの美容室を利用している方や、昔からの友達の訪問・交流の援助、等継続的な援助が出来るように配慮している。	親しい友人の訪問を積極的に受け入れ、継続的な関係を支援している。また、年賀状や暑中見舞いはできるだけ手書きし、友人や家族とのつながりを大切にしている。買い物や美容室、病院は、馴染んだ場所や人となるよう配慮している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	皆で楽しく過ごす時間や、気の合う同士で過ごせるような時間をつくり配慮を行っている。また、感情が日々時々変化する利用者の状況に配慮し、利用者同士の関係がうまくいくように、職員が調整役となり、支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も相談等あればいつでも応じることが出来る旨を説明。その後の相談や、在宅復帰後のフォローアップを利用者の担当居宅支援事業所の介護支援専門員との連携を図りながら支援できる体制を整えている。退所後、同一敷地内のサービスを利用されている方はお互いの事業所内の行き来を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で声掛けを行い、利用者の言葉や表情等から思いを汲み取りながら、把握に努めている。本人にとってどのような生活が望ましいのかを家族等と検討しながら行っている。	一人ひとりの思いは、日々の触れ合いや利用者の表情、言葉から把握している。また、利用者本人がどのような生活を望んでいるのか、家族と検討して意向を把握している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	実際に利用前に利用前のアセスメントを十分行うよう配慮している。また、利用前には語って頂けなかった本人の思いを知るため、折に触れ聴いている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりの生活リズムを理解するため、行動や小さな動作から利用者の現状に努め、「できること」「できないこと」を把握し、「できないこと」を「できること」にかえることができるために必要な本人の能力を引き出す観察を心がけている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者やご家族には日頃から思いや意見を聞き反映させる努力をしている。アセスメントを含め、職員全員で意見交換やモニタリング、カンファレンスを行っている。利用者、家族等と相談しながら介護計画の作成を行っている。	日頃から利用者や家族の意向を把握し、一人ひとりの課題を明確にして、アイデアを出し合った介護計画書である。アセスメント・話し合い・介護計画書・モニタリング・カンファレンス・見直し、事業所独自の一目瞭然の書式となっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別に介護計画に沿って日々の様子をいろいろな視点から記録を行っている。又、就業前に必ず申し送り簿等確認を義務付けている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の方が安心して楽しみながら地域で生活が続けられるように地域ボランティアとして幼稚園児の訪問、趣味の支援、また、非常時の対策として、地域交番との連絡、消防署参加の訓練、非常災害時のための協力等をお願いしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用者の方が安心して楽しみながら地域で生活を続けられるように地域ボランティアとして幼稚園児の訪問、趣味の支援、また、非常時の対策として、地域交番との連絡、消防署参加の訓練、非常災害時のための協力等をお願いしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力医の他、利用前からのかかりつけ医での医療を受けられるように家族等と連携をとっている。	利用者の自宅近くのかかりつけ医や協力医との連携が適切である。事業所は看護師が常勤しており、医療機関との連携を密にとり、状態が悪化しないように取り組んでいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置しており、常に利用者の健康状態や状況の変化に応じた支援を行えるようにしている。看護職員がいない時間は、介護職員の記録をもとに確実な連携を図っている。また、施設の看護職員のみならず、利用者のかかりつけ医院の担当看護職員等との気軽に相談できる関係を築いている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院による環境の変化を極力回避するために医師・ケースワーカーと連絡を取り合い、利用者の混乱を少なくなるように、入院施設への普段の様子等具体的にお知らせし、出来る限り早期に退院できるように支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	サービス開始時から重度化・終末期についての話し合いを行っている。状態の変化がある毎に、利用者・家族等との連携を取りながら支援を行っている。	サービス開始時に重要事項説明書に沿い、重度化や終末期について話し合いが行われている。状態が悪化した場合は早めに連絡をし、再確認をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応マニュアルを作成しており、周知徹底をおこなっている。緊急時マニュアル等、見直しを行いながら、すべての職員が緊急時、事故発生に対する訓練を定期的に行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	マニュアルを作成しており、月1回の防災訓練を行っている。又、消防署と連携を図り、消防署員立会にての訓練を定期的に行っている。消防署や近隣施設等に災害時の応援をお願いしている。	災害時のマニュアルをもとに、毎月、防災訓練を行い、消防署や地域の協力も得ている。また、事業所は施設の4階に位置しているため、開設時にスプリンクラーも設置している。備蓄もしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報保護の観点から規定を作成しており、職員勉強会等を通じて意識向上し、日々の関わりのなかで職員同士が確認し合っている。自己チェック表を記入し、自ら振り返ると共に、利用者に対する他職員の対応がどうであるのかを評価し合えるシステムが出来ている。	一人ひとりの尊重は、理念や基本方針に掲げ、定期的に「自己チェック表」に記入し、振り返りを行っている。また、個人情報保護やプライバシーのマニュアルを作成し、勉強会を行い、職員同士で互いに評価しあっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉の説明だけでなく、具体的に視覚に訴えたり等の配慮を行いながら、自分の持てる力を発揮できる支援を行っている。また、利用者に合わせた声かけを行い、出来る限り複数の選択肢を提示し、自ら選ぶことが出来るように配慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れはあるものの、利用者の体調や気持ちを尊重しその人のペースで生活をしていただけるような支援を行っている。施設で決めた行事やスケジュール等に全員参加する必要はなく、利用者のその時の希望により行動していただいている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服は基本的には利用者が決め、職員は見守り、支援を行っている。また、理容美容は利用者・家族等が望む店を利用できるように支援したり、利用者の希望のカット・毛染め・パーマ等が出来るように配慮している。行事等、利用者の生活週間に合わせて、化粧やおしゃれを楽しんでいただけるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の常備菜等作るなど、季節を楽しみながらの料理作り等を心がけ食事を楽しんで頂けるような配慮を行っている。調理、盛り付け、片付け等、利用者と共にしている。	食事作りは利用者の意見をもとに、栄養豊富で季節感のある料理を職員と利用者が一緒に作っている。全員が個性豊かなエプロンとバンダナをして、準備・盛り付け・片付けなど楽しんでいる。水分摂取にも充分配慮している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	初回アセスメント時から、嗜好品等について聞き取りを行い、利用者の様子や時間を見ながらの援助を行っている。また、利用者の好みに応じていつでも飲み物等飲むことが出来るように整えている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に歯磨きを促し、利用者の状態に応じて見守ったり、解除を行っている。就寝前には義歯の洗浄を行っている。また、口腔ケアの勉強会を行い口腔ケアの大切さや、具体的な磨き方の勉強を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者個人の習慣や排泄パターンを把握し、トイレ誘導することにより、トイレでの排泄を促している。また、トイレの場所がわかりやすい配慮をしている。誘導方法にも配慮し、利用者の自尊心を傷つけない支援を行っている。	利用者一人ひとりの排泄習慣やパターンを把握し、自立支援を目指している。利用者の70%がトイレでの自立ができている。とくに自室のトイレがベッドから目につきやすいように、家具の配置に気をつけている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘予防として繊維質の多い食材や乳製品を取り入れたり食材の工夫や、運動等を取り入れ日常的に身体を動かす機会を設け自然排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	いつでも利用者の希望により、入浴が出来るようにユニットバスも用意している。また、利用者の裸になる不安や羞恥心、恐怖心を配慮しながらの援助を心がけている。	夏は毎日、冬は隔日の入浴が基本であるが、利用者の希望に添い、いつでも入浴できるように、ユニットバスも用意している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者それぞれの生活パターン、体調、希望を配慮し支援を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋をケースに整理しておき、職員が把握できるようにしている。服薬時は必ず利用者に手渡したり、きちんと服用できているか確認している。薬の処方や用量が変更されたり、本人の状態変化がみられる時は、看護職員やかかりつけ医と連携をとれるように配慮し、家族等にも連絡、対応に当たっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の背景のアセスメントを行い、利用者が出来ることを生かした支援を心がけ自分らしさを発揮できるような役割分担を行い、利用者自らが楽しめる援助を心がけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家族との結びつきを大切にするための目的も兼ね、家族との外出も積極的に援助している。天気や利用者の状態・希望により日常的に散歩等で外出出来るように支援し、お弁当を持っての外出等も活発に行っている。	家族との繋がりを大切にし、家族と一緒に外出ができるよう支援をしている。スーパーや本屋など日常的な外出の支援もしている。弁当を持参しての外出も多い。また、児童公園に出向き、子供との触れあいも大切にしている。	

事業者名:グループホーム「リベラ・ホーム別府」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族よりお金を預かって事業所が管理しているが、外出時などは自分で払って頂けるように配慮している。また、利用者によっては家族の協力を得て少額のお金を持っているよう配慮している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族等に協力を得て、暑中お見舞いや年賀状等、出すことが出来るように支援している。また、いつでも電話が出来るように御家族等に協力をお願いしている。面会になかなか来れない方には、ご家族等からの電話やお手紙を依頼している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	総合思い出活動として五感への刺激を大切にしている。利用者方にとってストレスにならないか、常に意識して援助しながら援助している。職員のみならず、運営推進委員の方など、外部の方にも意見を求めながら、利用者にとって負担のない環境づくりを心がけている。	アニマルセラピーとして猫を飼っている。季節感のある生け花や手作りのクリスマスツリーを飾っている。また、インフルエンザの予防として、医療用の加湿器を置いている。手作りのペットボトルのクリスマスツリーの壁画などがある。「総合思い出活動」として五感への刺激を大切にしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者の状態の変化や利用者同士の関係に配慮しながら独りで過ごせるような時間や空間を確保すると共に、利用者の仲のよい同士でのくつろげる居場所づくりをおこなっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅との違いによる不安を最小限にする為に入居前、事前に利用者や家族等と相談し、居室作りを行った上での入居をお願いしている。新しいものを購入するのではなく、利用者が使い慣れたものをお持ち頂くように説明し、利用者が居心地の良さを配慮している。	サービスを利用する前に、事前に家族との話し合いの場をもち、慣れ親しんだ姿見の鏡台、仏壇、思い出の写真などを持ち込んでもらい、居心地の良い工夫をしている。さらに、個人の身体機能に合わせ、トイレへの導線を考慮した家具を配置するなど、身体機能の低下防止に配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	昔ながらの使い慣れている生活用品の準備や、利用者が使い勝手の良い物と言う視点で援助している。利用者の身体状況に応じて、手すりや椅子の大きさ等を配慮している。		